

美濃奇観  
三浦千春著  
下

ル 4  
3132  
2



凡  
3132  
2  
巻

島田  
藏書



觀卷下

養老龍 田跡山

美濃 三浦千春著

養老乃饒ハ美濃國多藝郡

養老寺の縁起及謡曲に本巢郡といへば誤なり郡界にらるるはとくに

こてもこの地本巢郡に屬すべしなり

白石村乃奥なる山中にありて古はひあり

此田跡山なり今古俗養老山と稱す其白石村ハ美濃路

大垣驛ノ東南二里半に高田

多藝郡島田村の内

こゝに市街ありて

其河より三拾町より未だ方に入らざる山村あり

人家九十六戸多く山腹に

とれより瀑布より流れて山沿十町よりより河邊にあり

○美濃 奇觀

○一

一く行に随く日ありぬ草木ありて巖をふりて立つ  
 形も山れたるを以水乃流世ふゆをいけりて流のゆるき  
 松何小和しくきく聞えぬ心をもみわらふ松にほるを  
 仙境にたれうかく倒く池は岩清らうにそて苔封  
 蔭ふわくく風衣とうけり流乃去ぎき面はわくく  
 夏れ日けうあききき肌小きゆりききい子足りけりきき  
 き合りけりてききに銀ツミカハ僕ときけりけりて母ききにたき  
 小蔭しくくハ布とうけりてあきく岩にくたきくあきく  
 玉とみききくく又時ききくハ缸と記してて景をきき

養走山之圖

天台女仙桃源洞仙甯時不為作其山圖其人一別  
 渺茫雲霧埋跡而難思而不能復招外籠暮而  
 無由再入惆悵附之夢境何其愚也此同者養老  
 仙境信之行者也菊水雖深瀑布鋒高案此求  
 之十出十入百往百來不如意天台桃源聞之如  
 悔其智不出於此世人不願求仙境則已苟願  
 延年舍此奚之

尾張 秦昌撰



○美濃奇觀



四〇



詞にき重きと云にありと瀑布は高さ直下九丈あり下は幅  
 九尺あり絶壁の上より流をちち下は一枚の巖石より  
 して淵を成く 他國の瀑布の龍壺といふより  
 てち立つこと大いに異なり さもついでけい  
 落來れ水れつうはけく人の膝の上を過るるたぬをく既  
 乃下に入るもぬ得るを奇とついで其水ももて清潔  
 甘美にしてこれと飲之ち後小浴もぬに諸病と治まぬ  
 驗あり昔よりついで傳へ古説ももあれと秘して老人乃ついで  
 水とちせりきにたりまむる美泉にもいあり今 明治十  
 一年  
 と詎ると一千百六十二年乃前元正天皇代に美泉とて

發見たるを聞しる靈龜三年九月おれ新し  
 け幸ましくその水と内手に持し内面を洗ひ又内疾  
 痛と除きたるは内痛處らみり愈て其志は 一七九  
 一七九  
 うりうねつて大内心にかたしあつて子孫りひりうて  
 還幸れ後同し其十一月詔して此美泉乃りたる事  
 大瑞小令を以て年號と卷老 符瑞書曰醴泉者美泉可以養  
 老蓋水之精也此の語ふも  
 物となりし又美濃國守及當者郡司等に位一階と授け  
 へゆ本郡來年乃調庸餘郡に庸と復し百官に人し和と



て文雅乃士杖と曳くまればはたえ長逝くそ外國  
人そとましくまじ賞を蒙け山中櫻桐多きまは春杖の  
あつたをりちを夏いさしりき能くうたれ露く青  
葉の蔭少く遠逝人との教をまじけ小三伏乃日ごと  
に來りて暑風さけ病とまじきゆるまじく仙何小可ぬ  
のまじいと形まじく

美濃國古蹟考に夏日遠近來而觸龍者如市謂愈頭  
痛然水勢剛大質弱者當之不堪云々可なり今も  
婦人としてたゞあましく壯に男子は能く

そ入ぬいぬ得ぬ

○養老院と名にけりは前記とつゞく元正帝の  
片時田山と名く美泉に發見たより竹瑞書の法小  
とて年号とよま考く改められしを勿くそれ能とせに  
稱へて養老乃院とつひをまじくは辨と俟とせぬれ  
たりつゝ美泉にまじく年号と改められ又も年辨と能のま  
あつと願つたりもくまじく例稀なりまじく能に  
也世表大寺に孫起に雄略天皇乃代美濃國本巢郡と  
源亟内とつゞくものありて母に考ありて天感ありて禮泉



傳出らばよりて老人と云々... 俗に云ふ

古傳ヲ輯集シテ誌スモノ歟云々又曰縁起... 建長四 古今著

開集 建長六 年の書 には此の事と載るは此の基と云と雄略帝の

内世に係りて作爲せしむる... 謡曲に養老と云ふは...

新撰美濃志曰 雄略の内代は此の氏と云ふは... 又俗名も源丞内と云ふは...

又俗名も源丞内と云ふは... 又俗名も源丞内と云ふは... 又俗名も源丞内と云ふは...

定つて一隊起すハ母ヤツシ十訓鈔著聞集等より父と一謡  
曲にハ又母ミ流ルルハ此の流ルルハ及ルルハ... 著聞集の書ハ當時俚俗と傳ふる所ハ一説を記す...

大日本史の文を鈔して後人の考案とす

古今著聞集卷八 孝養部曰昔元正乃所時美法國と云

し其男ありきと考ふる父と持たりし故と云男山の草木と云

して其價を得て父と仰るむはり云乃父朝夕而たりし

酒に愛し居りし故と云瓢チリヤと云ものを腰に懸きて酒を

飲家におもて居りしと云て父と仰るなり云乃時出

て新と云く母と云く父小若う云石と云く母と云く

にまらびなるに酒乃香の志きれはけりし故と云

と云りし故と云く石の中より水溢れぬ所なり其父酒を

似るをりし故と云く父傳りし故と云く母と云く

其れ故りしと云く父と云く母と云く父と云く母と云く

同キ一りて靈龜三年九月甲子其所へり事ありて獻祭

にりし故りし故りし故りし故りし故りし故りし故りし

と云く其れ感き居りし故りし故りし故りし故りし故りし

と云く其れ感き居りし故りし故りし故りし故りし故りし

考の能く其れ考ふる事たりし故りし故りし故りし故りし

と云考を改りし故りし故りし故りし故りし故りし

大日本史卷第二百二十二日美濃當耆郡樵夫

事父至孝家貧無財鬻薪自供其父嗜酒樵夫常  
提瓠過市賒酒以進一日採樵于山踐石誤仆覺  
傍有酒氣心怪之回顧左右石間水湧其色似酒  
試嘗之則馨烈甘美樵夫大喜汲而供父靈龜三  
年九月元正帝幸美濃車駕過當耆郡觀醴泉以  
為孝感之所致名泉為養老瀑因改元養老授樵  
夫官家至富饒

按續日本紀養老元年詔文盛稱醴泉愈疾之功無孝感事今從十訓鈔古今著聞集

○多藝行官址ハ多藝郡白石村字行在所ハ今ノ地ニ有リ

田跡山即養老山乃麓乃今其所ハ神社ハ多藝行官カミヤ神社

こゝ神社一向方拜殿二間四方元正天皇奉紀す例祭  
七月廿五日ハ里人等神輿を昇りて古行幸此京位を  
表す所故以て式也ハ今子歳と稱すハ遠と近ハ  
舊ハと忘るハその民力細の馬ハと見ハ一注昔元正天皇靈  
龜三年美濃公乃行幸ハ始不破行宮不破郡野上村に傳ハ也  
こゝ九月十八日甲寅より翌十九日乙卯より二日にて同廿日丙辰  
多藝郡上野山向廿七日癸亥より八日同多藝行宮ハ行幸  
りりりりり後養老二年ハ三月七日壬申沙叢草にハ若徳  
公乃醴泉にハ幸尾張伊賀伊勢等八國公卿ハ三月三日

成茂宮に遷りて終りしを乃同廿七日御  
美濃國に停御の  
日数詳あり 又  
 行宮乃地ハ昔年ハおぬりしやうとては乃証と傳ふ事  
 うとて吾友神谷道一曰正史に醜泉に引幸とせ醜泉のうと主  
 記りもなきハあれ多藝の宮に停御ありし事ハ疑ふこと  
 且天平十二年聖武天皇の行幸ハ美濃國に宮與と傳ふ事  
 事十一月廿六日己酉と十二月廿六日戊午にいつち十日同ありし事  
 不破頼官 垂井村の南の方に今  
御所野と稱する地あり 小宮多藝の宮に停御ありし事ハ疑ふこと  
 幸れゆきしとて正史に記す事ハ疑ふこと元正天皇乃  
 少御之記しし事ハ疑ふこと萬葉集の

奇々として詠書とてよみて去りて終り

萬葉集卷六天平十二年庚辰乃詠と輯録せし事

美濃國多藝行宮大伴宿禰東人作歌一首

從古人之言來流老人之變若云水曾名爾負龍之瀨

大伴宿禰家持作歌一首

田跡河之瀧乎清美香從古宮仕無多藝乃野之上雨

春老能ハ田跡山にけりし事ハ疑ふこと田跡川の能ハ詠り

今ハ田跡川と稱り  
瀧乃下流津屋川といふ 田跡山ハ大なる山とて多藝郡石津郡

とるく南のく伴勢國業名詠に傳ふこと多藝郡神社瀧

唐河に養老美泉辨小美濃人柏岡道守云美濃乃多彦  
より十里の所のやや遙小巔に小戸く伊勢のりき  
美濃のうもつうく多彦山とつひくあめ山はなをそのり  
かり今も美濃乃と多藝山とつひくあめ山のりよつとつひ  
こりく多藝乃野之上尔ハもねらち多彦山乃麓多藝乃  
地ありとつひく行宮神社のりる邊あり

○養老神社と俗菊水天神と稱せ此乃もつひく四町より  
東乃山腹石階と上で小徳山あり美濃神名記に多藝郡從四  
位上養老明神とてつひく社あり祭神詳ありつひく神社の

境内に菊水と稱す泉あり社此のり乃岩より湧きて  
夏の月を相なりつと涼しく澄みたり清き水あり  
乃ち水やうなく世に稀あり水あり

周囲に石を疊いて水と甚く廣  
く縦横各貳丈餘あり底淺  
く流て山下に到る芭蕉菊水の句にひきとりあり

此泉と菊水とつひく  
形容す

養老の謡曲天正中れは奉に菊水とつひく事あるたれはそのり  
既しはあらゆつとハ知れずあり按ては風俗通に南陽鄴縣  
有甘谷谷中水甘美上有大菊落水從山流下得其滋液谷中  
人家飲此水上壽百二十其中百餘歳云云又荆州記小鄴縣北

○美濃奇觀



○十三

養老神社圖



有菊水其涯芳菊被岸水甚甘馨胡廣久患風羸飲此疾  
 遂瘳ニダふやを以てく昔もろくに菊水を汲て疾と瘳一  
 且長壽を得しとて世に名られた故事なりといふと  
 て近古好事者其唱ナ初し物ありし一常くは邊ホウに菊花  
 ありし地に此もりしなやそつくと山深く森したる林下な  
 れは昔も今も菊乃花ありしとありしかの南陽縣の菊  
 水にもそつたる名稱ありし事詠ふ一養老の謡曲に彭祖  
 の菊の水をくつて飲落乃養老仙徳とつけしより七百歳と稱す  
 ありし薬乃水とて物ありしありしはもとより又い泉と

靈龜年中に湧出たりしとて此泉は流るる所ありし  
 養老美泉辨に委しき事ありしは今省さぬ

○養老寺ハ龍壽山元正院也稱し真宗東瓜なりこの寺  
 往古は天台宗ありし不動佛と傳來なりし改宗なりし  
 別堂と建てしは後以安置す即ち乃乃不動堂なりと  
本堂  
と並  
ハテ南の 一説ありし不動堂なりしは每奉皇郡ナニグを津村小在  
 し此所より引移せしは此寺乃りし地の奉皇  
 郡なりしはもと多勢郡小属勢なりし地なりし  
 況古書に徴するに後人附會せられたる天正年

土俗傳へて此龍  
 に浴せし人鯨魚を  
 不動尊のとしりし  
 地とすま村とす  
 といふ附會せし説あり

中豊臣太閤連致師知已と其地の學僧に命じしに謡曲百  
 番乃任釋と從ししをうりし中形る古老の徑中  
 を石律郡高須に領之徳永法中壽昌中こゝにて尚寺に  
 寄附せしに今に傳へく寺寶々其後慶長十二年未  
 乃杖法中堂宇坊舎を再建し寺前一株の松とあり  
 今徳永松や秘をゆきお流なりこれ寺乃北なる小山と舟  
 岡山とあり

○千歳樓ハ春老寺より山に登るこゝに御町あり  
瀑布と距  
 る七町余小  
 して東西二十七丈南北十六丈この地乃平地なり

向てつゝ廣く川海へなる橋ありこゝは昔老れ山ありて人  
 と憩ふ所又宿もこゝを登りまけぬ家にあり明和のころ  
 岡本喜十郎やいつ人始くおを以建たせしと昔こゝに  
 浴室と設き能乃流石汲り湯ありて人沐浴せけるは  
 今はそれ事絶つ後と湯れ山の稱ハ程存勢にあり櫻  
 乃木多し在りてありお堀を雪に埋りて動みぬやん  
 ありありは庭をけしき三方目にこぼるおちかく打されて美法  
 乃園内ハ更にお東の方尾張三河の山と望み南々伊勢に  
 海知多の浦うけく遠し一眸乃下にたたりし御あり



○美濃奇觀



○十六

千歳樓之圖



人の形は似ては家よりいふ事なきにせむ夏の間は山中  
のりし旅もいふ事なきに所は前より出する萬葉集も大伴  
東人大伴家持の字を彫たる碑たてり

○<sup>ミヤウ</sup>笙の嶽ハ養老龍乃西北き里所よりて高く秀るる峯あり  
丈より北東半里所ありて巨大なる巖石あり俗に之を立巖  
といふ岩上平らうにいふ事み十人を居せしやなりいふ事  
壯觀の地眺むるに勝もあら又養老龍より北二十町餘柏尾  
村の山中に瀑布あり<sup>ミヤウ</sup>秣隴といふ是大いなる山なりいふ事  
く早と向けと水常々變るる如く風景愛もいふ事惜しむ

山沿いに險阻ありてたぬとて<sup>アツ</sup>持つてと得て故に御あり  
いふ事あり人稀なり

○文政年中養老山下に百歳翁あり姓ハ井口名ハ仙兒  
壽山と號も多藝郡高田里乃人なり稟性もいふ事いふ事  
てまはく<sup>サカシ</sup>壯あり多養老の嶮山を杖もよとて杖を登り  
いふ事又中憲乃りいふ事細字に写す遠近あまを傳へて仙  
翁といふ其人を字法を書と求むるもの多し文政丙戌年  
八月百一歳ありて物故もいふ事詐胤五六十人ありいふ事其  
百歳翁ありて年々春養老山の千歳樓に大に宴會を用ひ

四方れ文人雅客の請し書畫詩歌を展觀し又席のき  
あそびをそまの其附は病の子孫曾孫のしるしを  
孫に女児八景にしく書を作しとて此を常く去  
とりて仙山やついで山ありあの壽をたえり  
仙境のついで空のついであり

壬午仲春詠古風一首贈養老山下百歳翁壽山因泰士

鉉之囑也 鈴木 服

伊迦仁志底和禮茂阿曳奈年多具比那伎與能奈賀比等  
乃美努邇安理登布

按もろに文政壬午ハ壽山九十七の歳リ然カニ百歳翁ヤまろもこのハ  
この翁九十六歳のころより自稱して百歳翁といふにこれなるべし

○養老山碑七基り

温泉詩歌碑 美濃押越 樋口道順 銘

養老泉碑銘 和哥碑陰記

備藩侍讀 近藤篤 識

吳超 程赤城 書

七十九翁 墨川 記

七言古體碑 和文碑陰記

紀藩 川合衡 賦

七言律詩碑

江戸

關其寧書

美濃栗笠

佐藤宣衡記

濃洲笠松令

龍川惟一題

江戸

詩佛大窪行書

瀑布七絕詩碑

江戸

董堂中井敬義併書

美濃人

當當利茂  
米齊松芥  
橘堂松石

菊水銘

碑陰記 トモニ基

月所菊泉

尾張儒臣

秦昂撰

姑蘓

稼圃江大采書

姑蘓

芸閣江大楯記

當湖

品三陸如金書

尾張城下

服部正直 全建

美濃今尾

水谷直方

○養老此碑又又詩詠とつてう摘出せしむるに

濃州養老泉碑銘

備藩侍讀近藤篤識

元正御極王道平々問民疾苦閔物則天當眷之罷  
多度之山天降嘉瑞地出奇泉清潔可食養而不窮  
人受其福王明之功一飲一浴不老不死衰耄再盛  
癯瘠可起有本如是万古混々君子是取監戒堪存  
陵谷變遷湮晦是懼於是建碑以識其所

乾隆五十年歲次己巳正月吉且吳超程赤城書

乾隆五十年ハ我天明五年なり程赤城ハ浙江の乍浦より不の人  
少くともこの年々長崎へ来る商估なりと西遊旅談より云々

多度山高跨二州飛泉百尺劈崖流一條縞練懸如

曬万點明珠碎不收曾為先王療痼疾又教孝子解  
窮愁喜我衰境受恩厚千里來為養老遊

濃州笠松令瀧川惟一題

文化九年壬申夏瀧令寄似此詩予為書之使其刻石  
庶幾長與此山不朽乎  
詩佛老人大窪行書

養老瀑布詩

梁川緯

養老改元光史編至今百丈瀑泉懸寒風珠玉噴為  
兩白日雷霆轟在天

恩田仲任

山勢崢嶸挿碧空懸泉一道彩雲中君王當日留鑿  
駕海內皆知養老功

岡田挺之

懸泉百丈映巖分佳境驚看勝所聞自有英靈鐘孝  
子應知至性感明君風潭六月吹晴雪石壁千年曳  
斷雲不獨甘香能養老洗纓吾欲避塵紛

河村益根

養老靈泉感昔時至今甘冽世人知程生筆蹟滕生  
頌準擬寒山一片碑

江馬之雅

養老之年養老山山頭飛瀑白雲間定知銀漢溢分  
水却惟身從廬嶽還

秦世壽

曾開嘉瑞迎宸駕又獻慈親變老顏寄言天下人臣  
子須帶匏尊來此山

靈龜帝行宮古跡

梁川緯

湖邊芳草瑤簪挺巖畔鳴泉玉珮分曾是六龍巡幸  
地滿山佳氣尚氤氳



本居宣長

田沼川の水はゆの壱と宇ひまをあつたに中ふ能の

養老殿

芝山持豊卿

りまき人御まき老れ千世のう次能の

富士谷御杖

田沼川舟ちろろ能の下妙勢れ子里のほか

題ち

田中道麻呂

老人と御まきまき春にりひあふら

養老能の捨

本居大平

水よはる清をもちぬき能つせき

養老の御殿

千種有功卿

道ちりぬゆまむむむむむむむ

松平義建 高須少将

のち島をれむせきうゆむむむむ

度會弘訓

なむむむむむむむむむむむむ

加茂季鷹

りう能くまゆむむむむむむむ







あつるやもものむらさき

嘉永六年九月往近江國時宿美濃國養老千

歳樓作歌

夏目千尋

いづれもあやふしき世にわづらひて天皇を神あはれ  
にこそとてふか山は美泉とわづらひて月ひかりたふ  
ゆねい人のつらさやうきやうきとてはなれぬ  
まればかみはなれぬとてよのなともいふ清いみ  
はなれぬあはれきやうきとてよのなともいふ清いみ  
まなれぬあはれきやうきとてよのなともいふ清いみ

あつるやもものむらさき  
あつるやもものむらさき  
あつるやもものむらさき  
あつるやもものむらさき

あつるやもものむらさき

田沼山の麓とよき

石川依平

あつるやもものむらさき  
あつるやもものむらさき  
あつるやもものむらさき  
あつるやもものむらさき









嘗初く石乃のひうり送乃傍の杉蔭よりて清く  
 のりてたらしむるも多田に動るるにつく

○芥菜カイサイ古昔漢小産と云ふれり物と云ふ者却暑つる事

保れりる巻巻のなるをれ芥と云ふるれり林丘寺玄瑤御哥元子

内親王の後水尾天皇御女法諱照山元瑤禪尼公天皇崩御の後薙髮して浄業を修りり北叡山雲母坂下りり林丘寺に開山して賢女に譽れり

根を中チウにひくればやあぢのたのむ巻巻と云ふたされり

○垣衣石キナガシ古昔岩山申より出ヒ質ヒ大ヒ燧石ヒわくくみ

く大なる石と云ふりりてみれば石片に皆紋理ありてわ

ち俗にまのふとて草に似たりはもて石れりり次なる化石の

垣衣石圖

たや乃山

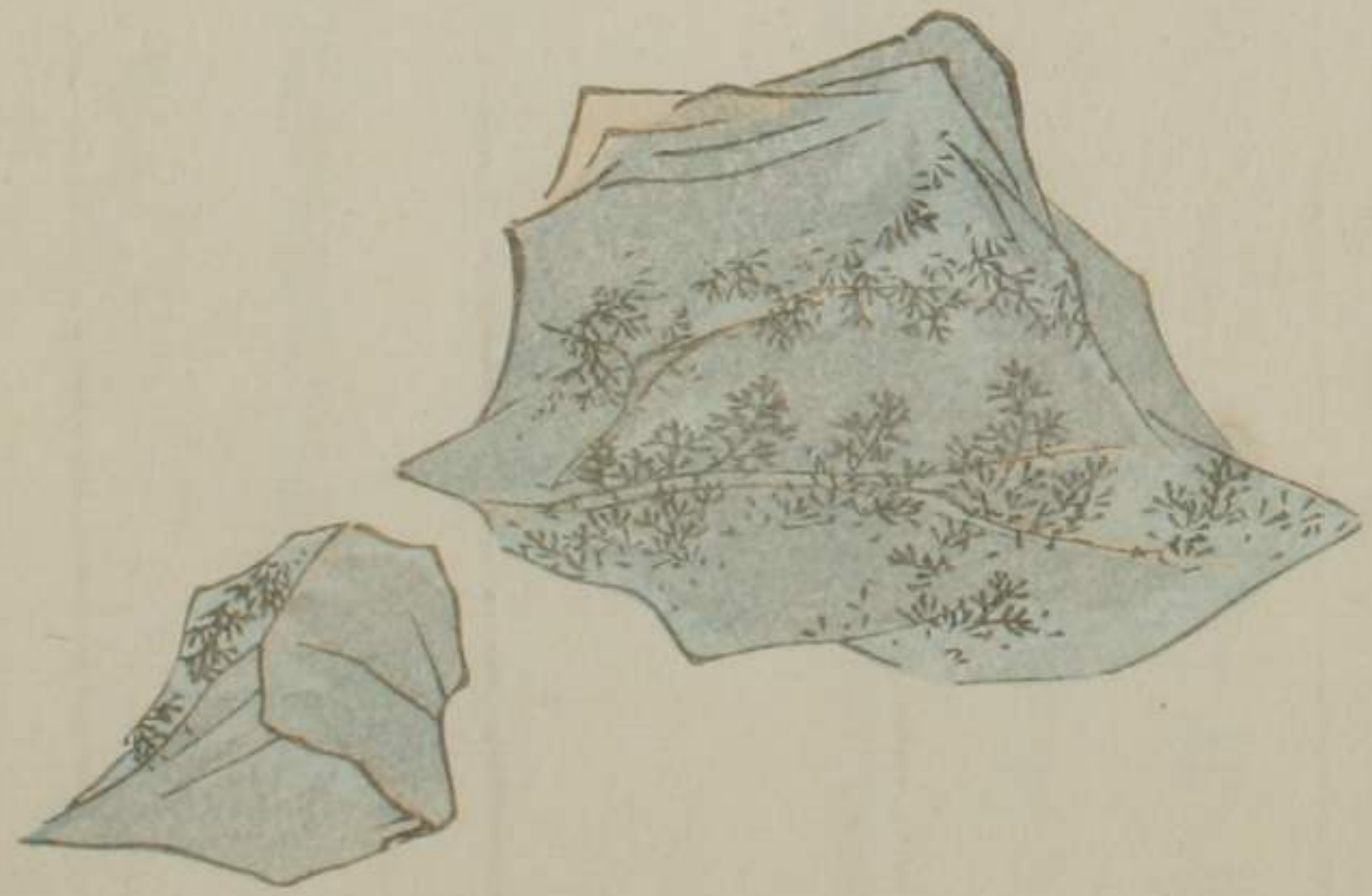
うすしゆの

あゝんを

ひう志乃乃

石よりり

子巻





たぐひぬくにて粟くく青物うぬ石乃うらに草此  
形は海中ふ墨もて畫りてぬくく鮮明<sup>キヤカ</sup>なりて世に好  
しれ石ありて那に南平縣とありて河に切ら花紋石堂つものな  
青くく山水禽魚なりてカクチカ形状なりて大明一統志に記  
たりいたるいありて

○養老酒を養老山に造り高田町ありて乃流伝く美を大  
まに醸し又松吉他村ありて製造を甚名遠く諸國より  
え迎來り外國人を大よむる以賞美なり新撰養濃志にも  
此酒精厚甘美他に比ぶものなりて一り嘉永六年紀藩

人長澤伴雄の記文あり

養老菊水酒記

美濃國多藝郡多度山乃美泉いむく元正天皇御幸  
ましくて大内氏所南に流しありて大内氏所ありて  
かふましく内痛處たりてにまほり好むきれいつて感得に  
てよむくは酒者若れ泉こつは春立春こつにこつを醗酒し  
釀して京に納りて名最且れ大内酒にさありてさむく同史  
か見え又これゆき京乃想まきる者乃こつは物治りしとく  
こつに世人よりてつうのこつを會りて流伝く天皇御





不暇詳書適聞三浦千春此  
書之撰成乃請閱之吾儂陽  
養老之醴泉長良之觀漁  
旁及金葉平古城趾之勝際祥  
載無遺余乃大喜囑千春謄  
寫一本以進獻千春崔耀曰

卑賤之著上辱 聖矚補採  
覽之萬一何幸榮加之將上  
梓以頒同好共被其亨之慶  
謀諸余曰善哉千春之舉予  
也我之奇洋之觀亦將由予  
春此書而益顯矣然則今日

之殊遇豈啻千春與此書之幸  
榮乎抑亦山川之幸榮也  
而又更推幸慶以及同好  
聖之主博厚之恩於是乎  
普矣余盡德憑就之刺  
成為錄其由於卷末時

皇明治已邦除夕前一日也  
夏昇縣令從五侯小崎利準



美濃奇觀

全貳冊

明治十二年十二月五日版權免許

著者

岐阜縣美濃國武儀郡小瀬村

岐阜縣士族

三浦千春

同縣同國岐阜末廣町

同縣平民

三浦饒三郎

出版人

同 岐阜米屋町

同縣平民

三浦源助

發兌人

尾張名古屋

荊鞠師豐原堂



